

## プロトグ 天皇と将軍の出会い

一九四五年九月二十七日、午前十時、一九三〇年製マルリン色のトルロイスが、三台の黒いタイムラーを従えて、静かに皇居桜田門を通り過ぎ、お堀を横切って行った。それが誰かがわかった通行人は振り返り、深々とお辞儀した。

この色は裕仁天皇の特注色である。天皇以外の人間が横に座らせないうため他の座席は用意されてはいない。そのため顧問であり通訳であるマキス木戸は、強張った顔の天皇裕仁のそばで、折りたたみの補助席に座っていた。

タイムラーの乗員は裕仁の侍従たちである。

裕仁は、憂鬱のために黄疸が悪化し、いつも専従の内科医が付き添っていた。もともとどこに行くにもいつも専従の内科医が付き添って行くのであるが

八月の国家引渡し以来、裕仁は不眠症に陥り、いつもにもまして手の震えがひどいようであった。彼にとってこの四年間は激動の年月であった。

一九四一年(昭和十六)、九月、パールハーバーの3ヶ月前、天皇は米軍基地の急襲と南方アジア占領見通しに関する最高機密計画に関するフリーフィングをつけていた。裕仁は、杉山司令官にどれほどの時間があればそれらが成し遂げられるのか尋ねた、司令官は慎重に「南方アジア占領は3ヶ月もあれば」と答えた。

事実、一ヶ月余分にかかったとはいえず、その通りになった。

しかしアメリカ力征服の目論見に関しては、司令官が答えよつがなかった。

裕仁は不機嫌になり、一九三七年(昭和十一年)に中国との戦争を始めるときも、杉山は一カ月ですむと言ったのに、すでに四年間も経過していると指摘し、怒りを爆発させた。

「中国大陸が広大であるといつならば、太平洋はその比ではないぞ、どつちや説明するつもりだ。」

そつ言われて、杉山は返す言葉もなく口も閉じてしまった。

裕仁は日本が優勢になったとき、アメリカが第一優先権をもてるような外交的決着への保証を望んでいた。

しかし彼をとりまく外交官は嘘をついた。

陸軍も海軍も総力戦で進軍する中、停戦のことなど誰も本気で考えてはいなかった。唯一、アメリカが最後の最後に石油の禁輸をやめるといつ大きな譲歩だけがこの事態を変えることができる、しかしそれは避けたいと、誰もが思っていたのである。

正式な宣戦布告は前もって用意されていた。

しかしながら、英訳の遅れといつ、なんとも不運で不幸である、いわば、アクシデントによってワシントンに届けられる前にパールハーバー攻撃は始まってしまったのである。

4台の車の中は、暗く陰気であった。

目にみえる東京の景色、全滅し瓦礫だらけの軍部の建物、爆撃された車、これらのものがさらに車内の雰囲気をも暗くしていた。

太平洋戦争では百五十万人の兵士が戦闘で死に、八百万程の市民が死傷した。

二百万万世帯の家屋が破壊され大きな被害をこつむつた。

B 29による最大の空襲があった日、千七百トンの焼夷弾が東京に落とされ百万人の人が死亡、百二十五万の家が破壊された。

戦争が終わった今、一千万人の日本人が餓死するのではないかと懸念されている。

東京の人口は六百七十五万人から三百万人に減り、家屋を失い、その多くは瓦礫の間たてた粗末な小屋で生活していた。大阪や他の街でも不具者となった復員兵、家のない孤児、絶望した婦人、ルペンがあちこちでみかけられた。

東京では、火葬場全死体の山を運搬するトラックが往来し、夜になれば、地下道は家のない者であふれかえった。そこに入れない人々は、上野公園で凍え死んでいった。

栄養失調で倒れるもの、そして肺結核も蔓延していた。

裕仁達の車がアメリカ大使館の前まで来ても、交通を停止させるはずのMPPは誰もいなかった。マンカーサーは遠回りさせるため、護衛の指定も拒否したのだ。

だから、虎ノ門の信号が赤になった時、他の車がそつであるように、裕仁の車も停止せざるをえなかった。赤信号で停止するなんて、この車に乗っているものには経験のないことであった。

マンカーサーは日本に来てまだ一カ月ほどしか経っていない。秋の終わりにフィリピンから厚木基地にやって来たのである。その二週間後、日本は彼に引き渡された。

彼はたった六千名の米兵で東京を支配するためにやってきたのだ。二百万のまだ十分に

余力のある日本兵がいる日本にである。

裕仁が日本国民に降伏するよう、ラジオで訴えたことはとても効果的であった。

しかし戦闘が再び燃え上がらないといつ確証は何もなかった。それでも、はたたりは重要であると誰もが悟ったのである。

そんな中でマッカーサー来日の最初の一週間、彼は皇室に対して微妙な諸問題を解決するため個人的な面談を召還すべく圧力をかけ続けていた。

しかし彼は待つことにした。

前大統領ハバード・フーパーを含むアメリカ保守政策家たちは、東アジアに於けるアメリカの将来の安全性を決定付けるために、皇室や日本の金融指導者の協力が得られることがとても重要といつ結論に達していた。

しかし、裕仁は西欧において戦時中の東条英機と同様に良い印象はもたれておらず一般的な容認は得られそうにもなかった。

裕仁も東条と同様、戦争の裏で推進役をしていたと思われていた。

裕仁といつ名前も連合国軍事裁判の戦犯予想リストの筆頭もしくはそれに準ずるものだったのである。マッカーサーは仲介者から、裕仁が主導権を取るべきで、彼が会談を申し出るべきだと知らされていた。

秘密の折衝が、マッカーサーの軍情報員と非常時の日本に個人的なチャンネルをもっている前戦争心理学者、ブリガディア・ボナ・ナエラーズ將軍の間でおこなわれた。

皇室の存続を左右するであろう会談を、裕仁の周囲の皇族や顧問が説得し、裕仁は吉田外務大臣を通じて九月二十一日にマッカーサーに会うよう手配すると返事をした。

会談は大使館にあるマッカーサー司令官の個室で行われることになった。

皇居の反対側にある占領軍の拠点、旧第一生命ビルよりはましであった。

この会談のとはアメリカ、日本の周りには、秘密裏にしていたにもかかわらず、それは周囲の知ることになった。大倉記念館を通過し大使館ゲートをくぐり、マッカーサーの家族が住む公邸に車は入っていた。

玄関では米軍の事務員とともに一般職員が待っていた。裕仁と木戸は車を降りた。

米兵は、裕仁が逃げる軍服ではなく、黒い燕尾服、ネクタイがむきたしのウイングカラーにブロンズといつ一九三〇年代の正装をしているのを見て、ちよと愉快であった。

裕仁は侍従に教わった様にそれまでかぶっていたシルクハットをぬぎ、手に持った。そして

アメリカ人をちらつとみた。

口ひげと金縁メガネが彼の虚弱さをかくすことはできなかった。おどおどし、緊張しているようであった。職員は裕仁を安心させるかのよつに微笑んで握手を求め、「よつこそおいでくださいました」といった。

裕仁は頼りなげに手をさした。その身振りを、もし日本人が見たならば驚いてしまつてである。最も上級の顧問である木戸ですらかつて裕仁の手を握ったことはない。

フエーブスが裕仁をビルの中誘導したとき、木戸も同行しようとしたが、別のアメリカ職員が殷勤無礼にそれを拒否し、通訳だけが入ることを許された。

木戸は側近の者たちと共にフエーブス等と話し合ったため会議室へ入った。

車列の到着を待っていたマッカーサーは、毛足の長い絨毯が敷き詰められた接待室の中で椅子をあちこちと動かしていた。

暖炉の前に裕仁を座らせようとしてソファーをおき、その隣にサイドチェアをおいた。

この椅子はマッカーサーが主治医ロジャー・エペルグに相談する時のもので、今回は裕仁が通訳を通しての質問に答える前に考える時間を与えるためであった。

マッカーサーが弁明したのだが、裕仁に本当は通訳などいらなかったのだ。若い頃アメリカに留学しており英語は堪能だった。この事実は四年もたってからドゥ・エペルグによつてマッカーサーに告げられた。マッカーサーがいかに裕仁の真実を知っていなかったといつことが暴露されたのである。秩父宮は英国で学んだので、エペルグな英語を話すであつたといつことはマッカーサーは知っていた。( )

裕仁が到着した。マッカーサーはドア分けより挨拶をした。「これは陛下 (Majesty)。」そして「ワ」ともせず握手をした。

裕仁の正装と対照的に、司令官の服装は、制帽も、ネクタイ階級章もないオープンカラーのサンタンであった。

会談に入る前に、打ち合わせ済みの米軍専用カメラマンにより、公式用の写真3枚が撮影された。裕仁は直立不動、顔は緊張にこわばり、腕は体の横で固定していた。

司令官は彼を見下ろし、ゆつたりとひじをかまえ、手は腰にあて颯爽としていた。

彼は、お気に入りの写真家が、多くの栄光の瞬間を撮影しながら、島から島へ泥沼の上陸作戦をくりかえし、劇的な広報写真の舞台に何度も立つような役者なのである。

暖炉の前に移動した裕仁はなんと、一人掛けサイドチェアに座ってしまい、司令官は通

訳と二人で同じソファに座るはめになってしまった。「これではタバコがすいにくい。マッカーサー困惑してしまった。そこで、裕仁にアメリカ製のタバコをさしたそうと前にすすんだタバコをすわない裕仁だが、どんなことも積極的に受け入れる気持ちだった。火をつけたとき、裕仁の手は震えていた



司令官がトンパイプを吸っているとき裕仁は両切りタバコを肺にすいこまずふかしていた、これが、二人がうちとけるチャンスを与えた。

日本人の召使が伝統的な紅茶ではなくコーヒートをもってきたが、裕仁は手をつけようとしない。毒を警戒して何も食べ

ないよう言われていたのかもしれないが、単にカップに手をだすことが出来なかったというのが真実であろう。

六十五才のマッカーサーは、会談を日露戦争終結後の一九〇六年に裕仁の父親からうけた印象をのぶることから始めた。

四十分の会談のあいた通訳は選びながら記録した。彼の仕事は英語のニュアンスを誤解しないことと、事前の宮中での打ち合わせによる政策に一致させるよう発言を監視することだった。

彼の書類の一部は外務省へいき、別の物が天皇の個人記録ファイルに入った。

マッカーサーと裕仁は会談内容を絶対に秘密にすることで同意したが、後に彼の記憶から天皇の言葉を引用し

「私は起った事すべて、そして日本の戦争犯罪に関連した事件の責任いっさい、一人を負う。」

「いろいろな事件に司令官や兵士、政治家で日本人の名前がたとしても、私が直接かつ単独で責任を負うものである。あなたが判定をどのようによつてしようが、私の生命は私のものではない。私が全責任を負うものである。」

マッカーサーは、天皇が敗戦の責任全てを負う意欲がある。と言ったことで、疑いもな

く、天皇は日本最高の紳士であると、高らかに宣言した。

一九七五年に通訳の記録として日本の雑誌に公開された内容と、二つの訳が一致していない！

通訳の記録には単独で責任を負う事に言及していない。

日本国民は、天皇が戦争責任をいくらか取る事は大変好ましいだろうし、取らなければとても失望するのじゃないか・そのよつな歴史的に重要な声明文が省かれる事はあつてはならないではないか。

司令官の記憶を信じるかぎりまさしく裕仁の言葉は謎のままである。裕仁がアメリカで学校へ行っていた件は彼を混乱させていた。

しかし我々がみるに、裕仁が言ってもいないのに裕仁が言った事にしたことは一つだけではない。会談が終了して十分後二人はつれそうな顔で出て来た。司令官は天皇を側に導き車まで案内した。

皇居へ引き返した天皇は生き返つたよつにみえ日頃よりずいぶん饒舌であった。

彼はまさに今、戦争犯罪の訴追からのがれたのだ。

哀れみのない戦争の後、広島、長崎のおぞましい出来事のおと、いくばくもないにあの3微笑みは一体何なのだろう。

二人の人間が会談を盗み聞きしていた。

妻のジーンと医者のおババグである。もちろんマッカーサー承知のことである。会見室でベルベットのカーテンの陰にひそんでいた。

あとになつてからは、ときたまにしか聞かえなかつたと主張したが・・・

我々は違う方法で盗聴できた。

ありのままの詳細を見抜くことについては、今のところ、この重大な局面で均等な二つの方向をたつたひとつの目でみることなのだ。

我々はもう一つの目を今開くことができぬ。今日のために何かがやってくることを知っている。これはびくつきする根の深い混乱する話なのだ。

この日のマッカーサーの主たる関心は、自然には振舞つてはいるが、一九四八年の大統領選挙で共和党候補として推されることであり、それには日本でアメリカの総督としての公の成功を確実にするようである。

大統領になりたいと思ひは一九三〇年頃からあり、彼の行動を形作ってきた。

民主党の特に「コトデー」ル派は戦後の日本の権力構造を永久的にもっと民主的にすることを望んでいた。マッカーサーは反動的保守派でどうみてもリベラルではないのだが、「ワシントン」の注文を実現するよう姿勢を表明した。

彼と彼のとりまき、及び「フーパー」は裕仁をつまぐ処理することで日本の占領を成功させることができた。そしてその弱みに付け込んだやり方は絶対に秘密にしておかなければならぬ。起訴するとか、絞首刑とか銃殺にするとか、天皇はおどかさず、取引に応じた。アメとムチを用いて徹底的にゆすり日本の金融機関、生保の力関係、内部知識を聞き出した。

そうすると、それに関係する人々は圧力をつけることになり、不正な駆け引きが行われ、日本の戦後の国力再構築はマッカーサーの金融屋達や保守政治家に合わせて再構築されることになった。もちろん、アメリカのリベラルよりはいいが。

降伏後、最初の一週間の間にもっぱら東条に対しての非難が盛り上がり、パール小バの直接の責任は天皇から離れていくようにされた。

戦争終結のはるか前、スースにおいて、アメリカ日本の公使の間に秘密の合意が成り立っていた。裕仁を助けるために、天皇は東条や軍国主義者に騙されていて、彼らこそが戦争の本当の責任者であるとすれば世論は納得するであろう。

この作戦に沿ってマッカーサーに会う二日前に、裕仁は「コトクタイム」の特派員からの質問に対して「パール小バ」攻撃前に宣戦布告が伝わらなかった失敗は東条に原因があると書面で伝えた。

これは正しくない。遅れたのは計略であったのだ。彼らは九月には全員合意していた。攻撃のはるか前に。

彼の生涯四十四年間の記憶では、裕仁は個人の戦争責任を受けたことは公式にはまったくない。戦争開始では、アメリカ市民が怒り、戦争終結では、日本人が怒ったのだ。

木戸は個人的に、先祖の不名誉になるより天皇をやめるように助言したが、裕仁が責任を拒絶するため苦しむように成った。

裕仁は彼の国におこった悲劇を嘆き悲しんだが、軍司令官の失敗に関しては、何ら責任を感じていなかったし、繰り返し勝つ彼らは保証したのに、がっかりさせただけであつた。

裕仁が戦争を続ける最終的判断を二年間くりのべたのだが、それは彼らの失敗であり、

自分のせいとはおもっていない。

裕仁の助命作戦は何年もかかってしまつたろう。あまりにはやく赦免しようとするとは彼は立場をなくすであろう。

裕仁が強情になつてきたり、ためらったり、こまかそうすると、マッカーサーはアメリカ議会とか他国の恐いクレムリンなどからの責任追及の言葉でおどしのださる。なるほど、この恐喝は大変な機転と繊細さをもつてなし遂げなければならないが、マッカーサーはあやふやで遠回しにする経験をもっている。

裕仁が大使館を去るときにトルロイスの中で木戸に言った。「マッカーサーが私は陛下が政界の人々や重要な人々を知っていると信じている。したがって、今からは、いろいろなことの指導をつけたい。」と言つた、と。

我々は、続いて巨大な不正行為を示す新しい証拠を明らかにする。

誰がまきこまれたのか。そしていかにして国際戦犯法廷の前に、東条將軍や重要参考人がマッカーサーのタツツに強制され、彼らの証言をかえさせ偽証を強要させられたのか。南京の虐殺で、天皇の叔父朝香宮は何の罪も負わなかったが、彼を守ることを強制され、南京にいなかったにもかかわらず、罪を負わされ少なくとも一人の将校が絞首刑になった。しかしこれだけでは止まらない。まもなく完璧に手に負えないことがあつた。

ミスターケネリー、マッカーサーなど彼のとりまきは、天皇を人質にするに十分であると思つた。彼らは誤解したのだ。

闇の中に日本の本当の力が残つていったのだ。

彼は天皇を「モンのように」絞りにくせせ。しかし本当の権力者達は、何の痛さも感じなかつた。

彼らは横から裏から監視してマッカーサーが実際に終わるところを見定めた。

裕仁の秘密のおまじないが、日本人交渉人をつまぐ使って不正な裏取引を生む事になつた。最初に彼らは、マッカーサーとその団体と共に天皇を救う偽証に関与し、他の人たちも無罪にする圧力を繰り返し掛けることができた。

この誘導の最初は、全皇族の免罪であつたが、日本の金融と工業の「サート」全体のためでもあつた。そのグループは同盟国にとって、追放か訴追の明確なまどであつた。

最初は、戦債をもつていたすべての日本の銀行、財閥、生保を解散もしくはつぶすつもり

であったのに、放免された。

彼らは日本は破産した。という論理で戦時賠償金を免除させた。その間ドイツは過去の賠償と補償に三百億マルク支払ったが、日本はたったの二十億マルクであった。今もドイツは補償と賠償の計画を続けている。日本はその足元にもおよばない。すべては一九五一年に決着したと言われている。

日本の民主主義の促進や、複数の政党の育成をするわけでもなく、マッカーサーは反体制勢力を妨害し戦後の労働争議を弾圧し、そしていかなるテロ隊も拘置した。

次に一ダースもの征服した国々からの何十億ドルもの財宝を略奪した暗黒街の連中を含む巣鴨で起訴された戦犯たちが解放される。

最終的に、戦争責任に対してアメリカの最初のブラックリストの中から二十二万人が免除された。

マッカーサーの元の意図ではその人々を免除することではなかったが、天皇の顧問は將軍の望みは一步步忍耐強く利用しようという単純なことだと悟った。

ゆすりは、両者の行く手に働くことができる。

ほとんどの日本人は天皇と司令官の個人会談については知っていた。彼が新聞各社に写真を公開するよう要求したときにだが……

この写真で正装の天皇が無礼な平服のアメリカ人になればかばかしいほど従属しているように写っており大変な騒ぎになった。

前もって注意深く調べられた写真家だけが天皇の写真をとることが許された。望遠レンズで離れたところから天皇の上半身のみをみせて、決して他の部分をみせてはいけなかった。多くの日本人は今でも直接天皇の顔をカメラでのぞくと目がつぶれると信じているのである。

マッカーサーによる天皇の写真はおそらく横柄な政治的な一撃であったであらう、たいしたことはないが、しかしこれがマッカーサーが裕仁を扱った上で裏目に、逆に日本に有利に働くことになった。

東京に於ける政治の動きが写真の公表に不服を唱えたときに、マッカーサーは出版規則を廃止することで、圧力をねじ曲げた。そのときに、直接市民の自由に及んだのだが日本の憲兵隊や保安機関を非合法化した。天皇の兄弟、東久邇は政治変革の初めに抗議のために辞任した。マッカーサーは怒った時、何ができるかをみせつけるためにそう

した。彼は最後に、一般市民の真の自由への道を開きそうになかったのだが、それは日本の国体を変えることを引き起すのである。少し過激だったようだ。彼の視点では極右でなかった人はすべて共産主義であった。

裕仁との秘密会談における本当の味が一般大衆に知られると、全世界に影響を及ぼすことが推測できた。アジアではめつたにないことである、日本人ほどたまごと努力する者はいない。マッカーサーとそのスタッフが操るうとして、操られていた考えはとんでもない事だったのだ。

彼は日本と西欧の相違点に焦点を合わせるべきなのに、類似点に興味をそらわれて失敗が発生した。相違点は危険なものだった。類似は安心をもたらせるものであり心地よいものである。

クネカー教の日本のネットワークを例にあげよう。クネカー教は小集団にもかかわらず注目すべき影響力を持って、日本社会に浸透していった。

ボナフェーズ將軍についてのべよう。彼は大使館の門でお迎えをする人ではない。興味深い人脈をもつ普通ではない軍將校である。彼は家族を通して、日本外交官、寺崎英哉と結託していた。寺崎はあの日タイムラーの軍列の中にいた。

両者は聡明な役人だ。そして寺崎はパールハーバーの時、ワシントン日本大使館の一等書記官であったのである。

彼とその家族は抑留され、他の外交官と交換された。戦時中は日本でみじめな日々をおくった。今では寺崎は天皇と皇族のための実務を世話する宮内省に転籍していた。基本的に彼の仕事はフェーズ將軍、マッカーサーと天皇個人のお世話係を勤める事である。仕事に関しては完璧であった。彼は米国好きでよく米国のことをわかっていて、フェーズは寺崎の奥さんの親類である。彼女グエン・ハルドはクネカー教のラインからきた。ボナー・フェーズは日本人クネカー教徒の交換学生と友人になった。インディアナのクネカーカレッジに通っていたその二人、渡辺由利、河合美智子は日本の教育指導者になり、皇室との交流をもった。戦後の東京で、彼女らは秘密の使命を実行する手助けをしていた。はい話、フェーズと寺崎は、小バードファイバーから、宮中深く、節子やそのファミリーの側近にまで届くクネカー教とクネカーに近い者へのネットワークの一部であった。

日本人の支配層の多くは仏教徒や神道であったが、クリスチャンの妻をもっていた。だが



ら不安定な一九二〇、三〇、四〇年代の攻撃的好戦的な仏教、神道国家の中核部分では多くのキリスト教徒がいたし、多くはクナカー教徒であった。彼らは戦争の間、英国と米国に大きな影響を及ぼした。そして戦争を妨げるほどはできないまでも停戦しよつと試みた。

これら宮中の職員の数少ない者はスイス、英国、米国のクナカー教のつてきたよりスイスからロンドンやモスクワの秘密の和平団をおくった。

戦後彼らは、皇室を戦犯の屈辱や起訴から救つたためいろいろな手段で干渉してきた。これはある部分ではほめるに足る様に見えるが、暗い側面も持っていた。

同様なネットワークをボナー、フェラーズやその一味は、マッカーサーの個人的目的や彼の保守的後援者の目的を達成するためのいやみに使った。

同盟国側から見ると、このキリストもどきの組織は権力組織のあやとりであった。そのリーダーの一人が戦前の日本大使で、国務省次官のジョセフグリコである。

グリコはフェラーズ将軍と前大統領フーバーと長い結び付をもっている。グリコの妻アリスは十九世紀に西欧通商を日本に開いたペリーの子孫であった。アリス

は子供の頃、東京で学び流暢な日本語を話し、日本の上流階級の少女達と親密になった。その中のひとりに裕仁の母となる人がいたのである。

そうアリスとジョセフは日本の上流社会でユクナな接近方法をとつたのである。彼の従兄妹の一人、ジーン・ノートンはモルガン財閥として知られる銀行の帝王、J.P.モルガンの息子と結婚した。モルガン銀行は一九二〇年代、三十年代に巨額の融資を日本に行

った。そして大きな投資をするためGEのような米企業をたくさん手伝ってきた。だからグリコは拡大したモルガンファミリーの一部として、日本の金融界では居心地

よい扱いをつけていた。一九三〇年代の在日大使館時代グリコは子供時代ボストンのエサート達とそつたよつと、日本の男女と交際した。

そのなかで多くのクナカー教徒やキリスト教徒が集い、彼はコイイングランドの清教徒と同等のことをアジアで演じていると感じた。彼のみるところ日本は清潔で整然と

して洗練されていた。彼が会つた日本の金融エサートはきびきびと上品で美しく礼儀正

しかった。しかし日本の体制の中に深くうめこまれた汚職制度を見逃したか、見ないよつにした。そしてそれは今でも深く埋め込まれて残ったままで。

二十世紀の最初の五十年、大和朝廷の中核は裕仁の母、節子皇后であった。偉大な特

性をもつ小柄な彼女は一九一〇年から亡くなる一九五〇前半まで皇室業務に於いて隠れた権力者であった。日本のような母系社会では天皇の母は侮りがたい影響力をもっている。彼女は過去何世紀にもわたり天皇の嫁をだす家柄の一つの藤原家であるが、節子は田舎のクナカー教徒からのしあがってきた。毎日聖書を読んだと言っている。キリスト教の実践者であると強く指摘している。が、宮内省はそれを注意深く隠していた。三十年間末亡人の皇太后は、日本人クナカーと他のキリスト教徒に囲まれていた。側近に彼らを加え、宮内省そして政府の官僚の上級ポストに指名される様、慎重にお膳立てした。

節子のよつな上層部に驚くべき数のキリスト教徒がいた。しかしながら、彼らは自分の社会の忠誠を台無しにするよつな改造をすることはなかった。このよつな母、妻、子供達といつ大きなネットワークで、日本に暴力や軍国主義がますますひどく成るなかで博愛主義や平和主義を決意した。

この秘密のネットワークの多くが女性で構成されていたことは驚くことではない。昔から日本は、しばしば女性によつて統治されていた。

歴史的にみても大和朝廷は京都のそば、大和盆地の中で宮殿をもち、際立つた力をもつ卑弥呼といつ女性がいた。(訳者注、これは誤解だ！筆者は駐日英国大使に日本の歴史を習つたよつだが、卑弥呼が大和にいた証拠も、ましてや天皇家の祖先である証拠もない。ただし、外国人にそのよつまで要求するのは酷なかも。)

中国の史書にもその当時の日本は女性に支配されていたと、明らかにされている。卑弥呼は600年続く神官および巫女の血統から伝わってきたと考えられていた。

これらの帝国の有史以前の祖先は、温暖な南の島九州である。

伝説(神話)によると太陽神天照が皇室の血統を最初に作つた。そして二千五百年、明仁と成仁によつて断絶をまぬがれた。

初めに卑弥呼に支配された大和はその場所がわからなかった。原始アイヌも分からな

いし、その起源はいまだに不明である。大和民族は新しくやってきた民族である。最初に稲作文化をもつて九州の低地に中国から移民し、より好戦的な朝鮮半島からの移民

が北方山岳地帯に定住した。いくつかの戦闘があり移民の文化は混血していった。そして最も強い血族が封建制の階級制度を定着させた。より肥沃な農業用の土地を探してだんだんと移住しながら東進し、今の京都や大阪のある本州へ渡り、だんだんとア

イヌを圧迫しその土地をとりあげた。

こつして最強氏族の卑弥呼を初代に大和川のほとりで朝廷ができた。

卑弥呼は「神の道」、神道に仕える高位聖職者、つまり皇帝の血族を継承した。

女性に強い影響力を持ち続けたが、ときには独裁者であつたり、若い天皇の摂政とが戦いの中で人質になつたりした。

これは、將軍又は総司令官あるいはフイバルのサムライにより軍事独占政権が樹立した十二世紀の末に終わった。そして、皇室は長い闇の中へ入つた。

大和朝廷の生存はしばしば危険にさらされてきた。

天皇の關係者から宝さがしにきたものがある。彼は君主として統治力を得るか、天皇を傀儡にしてしまつてか模索して来た。

歴史の中で特に成り行き上、天皇家は世の中より精神的な影響力をもつた。

ときどき天皇は粥をすすするほど苦しつた。多くの天皇は仏教寺院に送られ、何人かは殺害され、島へ送られた。

殆どの時、天皇は無力であつた。裏の権力者が暴政をはたしてもうまく覆ひ隠して来た。どの時代でも天皇家の歴史書は、裏側の権力者の顔なしで描くことはできない。

卑弥呼から千八百六十八年明治天皇まで、五の氏族が王権を超える異常な力を得た。蘇我氏、藤原氏、源氏、足利家、徳川家である。

蘇我と藤原は金持ちの貴族で娘を天皇に嫁がせて代々の子孫のために摂政として間接的に支配した。

他の家系、源氏、足利、徳川は十二世紀初めごろに独裁者として確立し、以後八百年間日本を支配して来た。通常は皇室を無価値なものとするか、無視して来た。

將軍達も同様の種類であるが、典型的には各時代の最初の一代または二代目までは暴力と裏切りによって支配した。抜け目のないタフな人だつた。しかし、摂政や妻や顧問によって動かされた弱虫たちがそのあとを継承して来た。

蘇我氏は五世紀の日本で天皇を表にたてて注意をそらし、裏で秘密に世の中を動かした先駆者である。三世紀にわたつて蘇我氏はフイバルに立ち向かつて来たが、藤原氏によつて没落し絶滅させられて来た。

藤原氏的方式は違つて来た。彼らは支配を保つたため蘇我と仕掛けは同じものを使用した。

ごまかし、買収、殺人を隠すことは天皇家を飾り物として保つのに重要であつた。天孫として天皇は純粹だし、神聖にみえた。誰も天皇を冒瀆しないのである。

なぜならば、それは神の言流になる上に処刑される罪なのであつた。

同じ理由で天皇の顧問役も非難されることはない。

これで、権力の裏側の人間が挑戦も転覆もされることなく、好きなだけ汚職をすることが出来る。危険は普通、宮中の対抗者からのみやつてくる。彼らは優位に立つよう共謀や賄賂や毒を使用し、又、皇室の寝室へわが娘を送り込んだ。

藤原家は、新しい天皇になつた側近の主導権も破壊するため、あらゆる手段を使った。そして権力が広がらないよう、何世紀にもわたり近親交配を続けることになつた。

それは天皇をほんの少しの責任で権威の特権すべてを享受する、ずるい立場におくことになつた。

反抗することは大変な勇気が必要とされるであらう。少しはあつたのだが。

殆どの天皇は豪華さにあふれセクシーな女官に囲まれ浪費の出来るすべての食べ物、飲み物を手に入れて演劇などを楽しんだ。

天皇はするどい洞察力を持ち続けたが、その乱れた行動を改める事をせず、たまたま権力を持ったものに同調し、その洞察力を使う事はほとんどなかつた。

將軍の下、安定的な立場にいた八百年で日本人の殆どは、天皇が存在していることも、小さな宮殿の中に神様として崇拜されている事も気づかなかつた。

千八百六十八年の明治維新で將軍が倒れたとき、日本の新しい独裁者が天孫の血統を支配した。まだ十五歳の少年で全土が神聖な天皇により統治されると公告された。

何と荒つぽいことであらう。

今日でも日本には発言と行動にはとても大きな隔たりがある。

日本版「裸の王様」があつたとしたら、仕立て屋が眞実を明らかにしようとして処刑され、子供が眞実をしゃべり、百姓が眞実をみたために、処刑されたであらう。

千八百六十八年の明治維新は革命ではなかつた。日本はまだ本来の市民革命を経験していないが、そんなよつなものが始まつたのだらう。

明治のクーデターは、単に本當の権力が冷酷な舞台裏の派閥から他へ移転したといつこと、そして少年天皇は、京都から將軍のいた東京の宮殿へ移転しただけである。

彼らは確かに天皇が支配しているようにしたが、彼はただの飾り物だつた。ちよつと蘇

我氏や藤原氏のように、君主を裏の見えない手でライバルの権力派閥の上に、真の力は今日でも残っている。

他の皇族たちは保護されなかった。隔離することは避けられなかった。なぜならば天皇家はある意味で、実際日本を支配している派閥の人間なのだから。

人民を操つて天皇を操っているのは誰か。この隔離は、似たように利用しようとする者妨害した。天皇は神聖な偶像として超自然の魔法の影響力をもっている、「雲上人」である。神格化され、侵すべからずである。従って彼の顧問や政府にも応用された。だから彼らは同様に守られた。日本の歴史でほとんど不敬罪は死罪として罰せられた。同様に建設的な批判は不可能である。神聖視は通俗さを隠した。

ときどき自由主義とか他の性格異常者が独裁者と天皇を引き離そうと試みたが、天皇批判を口にするこなく政府を批判しただけであった。しかし、新しい日本の形態をデザインした明治の策士たちはこれを見越していた。そして上手にすべての結論も政体の外観も天皇に結びつけた。これが明治維新であり、明治政府であり、天皇の意志であり、法であり軍隊で、王座の決定であり万世一系であった。

この神格化のおかげで裕仁だけが外国で有名になり、彼の母、父、兄弟、家族の他の者も殆ど知られていなかった。

さて、学問の興隆のおかげと、加えて最近の発見と皇室の日記の公開により、小さな破片から五世代の肖像を集めることが可能になった。四人の天皇と、最新の皇太子のもの。

明治天皇ですらおぼろげにしか残っていない。彼の真の個性はイメージつくりのおかげで隠されていた。人前では芝居じみた姿であったが、普段は全く違いなまけもので我儘、女好きで、馬や花を好み、お気に入りと一緒に中飲んでいた。彼を制御するのは困難であった。明治天皇がとても扱いにくかったので側近達はその子供や孫には別の方法をとることにした。彼らを従順に、完全に顧問や侍従に従わせるために大変な努力がなされた。宮中のスタッフは一万人を越える様になった。

彼らは明治天皇の孫と、継承者である大正天皇が大きくなるときに失敗した。

有名な歴史家は大正天皇を真剣に考えるに値しない。出来損ないの道化師のように書き上げた。精神不安定で飲んだくれの遊び人である。

大正天皇が偉大な明治天皇である父と比較されると、いつも頭が足りないと見られた。

しかしそれは間違った比較である。なぜなら父のイメージはひどく誇張され、息子は傷つけられていた。

ある研究では、大正天皇はさわやかな貴公子であると判明した。ふしだらな狂人として大正天皇に与えられた風刺は山県元帥の作り話が大きくなったものだ。山県は日本を秘密警察国家に落とし込み、軍国主義へと導いていった。天皇の名声を傷つけながら王座を美化した。

新聞への繰り返し返しの漏洩で若い大皇の名声をぶちこわした。節子妃とその味方は忠実に逆襲することは止め、彼女は舞台裏で動き裕仁皇太子の結婚選択競争で古い將軍に恥をかかすことができた。山県は宮中の寝床に女官の代理人を潜り込ませようとしていたが失敗し終着駅で放り出された。しかし彼の冷酷で冷血なやりかたは二十世紀の安楽な時代の日本にとって害を与えた。

一九二〇年になって皇室神話は教条になってきた。思想警察はあらゆる社会の階層に存在し、隣人家族にも通知された。これは生活全般を監視され、すべての政体批判は投獄されるか、新しい残酷な法律で処刑された。

こんな恐怖の状況（アジア的な、いやヨーロッパの宗教裁判をしるばせる）の中で軍国主義が台頭し、大企業や金融財閥が共同経営的に日本を支配したので。

裕仁には祖父や父との違いが出てきた。明治のものぐさや、大正のあつかましさをやめるため、皇室は裕仁をあやつり、生涯、顧問たちに従属させ、決定の過程を解りにくくした。これは戦争中、優勢を取り戻そうと長々と待っている時、悲劇的な結果をもたらした。裕仁は有利な立場で和平を得ることができたのである。彼の治世は日本の歴史の中で最長であったし、また議論の余地がある。明仁天皇は同類のこまかしに對する抵抗から、貴族の外から妃をむかえ、日本の人民と自分を同一視した。皇太子、徳仁はその新鮮な傾向を続け節子以来最も独立した嫁を宮殿につれてきた。彼らは彼らの敵を持っている。日本の保守勢力は裕仁の母を使い美智子と稚子の影響力が増すことを妨害し、失望させた。

両夫人とも悪意ある中傷的になってしまった。天皇の市民化はまだ危険のままで王妃と皇太子に時代がやってきた。最初のフキヤンダルは、お金が日本の宗教であることをはっきりさせた…神道ではないのだ。

なぜなら貪欲は宗教の基本である。



どつして、明治維新の背後にある本当の動機が政治にとってかわり、又どつして、欲が秘密同盟、戦争、災害に国を導いたのかを調べるなければならない。

一九二〇年日英の外交上の同盟は、日米の個人的金融同盟の大きな網に置き換えられた。モルガンのトーマス・ラモンの助言で、アメリカは大きな個人融資と投資をおこなった。一九二九年ウォール街でおきた日本で初めての経済破綻（恐慌）の時、繁栄の殆どは担保なしの甘い誘惑の上にあることを明白にした。アメリカではそれらが銀行や金融分野の大改革と一般市民救済のために過激な社会計画を生じさせた。

日本では資源とエネルギーのショートが自分自身の恐怖心から、金融屋を救おうとした時にこのよつな事は、何も起こらなかった。

自暴自棄の人を安心させたりするよつなことは何もなされなかったのだ。食べることも出来ない人々は家族によって何十万人もの少女を売春婦として売ってしまった。システムを改革する代わりに日本の財閥たちは批評家や皇道派を逮捕し処刑した。今から七十年前に同じ金融汚職が最悪の経済危機として日本にもたらされた。第二次大戦の間、日本の軍国主義は向こう見ずな栄光が入り混じってきた。陸軍も海軍も征服と略奪にのりだした時、東京はもう逃れる事は出来なかった。

私達は多くの征服を知っているが、略奪はびつくりするほど少ない。日本人の虐殺は百万人が殺され何十億が盗まれた。しかし略奪品はここに消えてしまった。

第二次世界大戦の大きな謎の一つは「ダース」もの征服した国々から日本軍が押収した価値ある何十億ドルに何が起つたかである。答えは天皇家に関わってくる。そう、これがこの本誌の重要な部分なのだ。

一九四二年六月、ミッドウェイの戦いの後と思われるが、戦況は悪化していた。多くの皇子達は、戦争の残りの時期を万が一にそなえて戦利品をつまぐ隠すことに専念した。この略奪と陰謀の組織的な活動「トドネーム」「トルアンリリー」は裕仁の弟、秩父宮の直接指導のもとに行われた。

これまで彼は富士のふもと、の田舎屋敷で肺結核が回復するため軍から離れて妻の看病の元、療養していたと見なされていた。しかし、実際は占領中の中国と東南アジアを略奪品の収集を管理しながら旅をしていたのである。医療船を使いマラウ運び日本に向けて積荷を輸送させるために……。

一九四三年の初めから四十五年の半ばまで秩父宮はフィリピンにて財宝の監視して

た。塹壕の中やスウェーデンの古教会の中そして巨大な地下のトンネルの「トルアンリリー」はアジアで奪った通貨、金、プラチナ、銀、宝石、絵画、仏具そして「ダース」以上の金の仏像（これは一トンをこえるものなど）などである。日本の関係者によると、物理的に略奪品を日本移動できなくなり、それら一十億の金と宝石はフィリピンで二百箇所以上の用地に隠匿された。

私達は日本人と秩父宮の側近を含む人数を自撃者や関係者から検証することができた。連合国が母国に侵入され日本の地位が破壊されそうになって裕仁天皇はついに早急な降伏を覚悟させられた。しかし、祖国を復旧させる数十億ドルの財宝などの大きな貴重な資源を守るために戦争を耐えることは辛かった。

一九九七年、朝日テレビの日本調査チームが水面下で「トルアンリリー」にやってきた。そこで千八百本の金の延べ棒（十五億ドルの価値）を撮影した。（核心のサンプルも撮影した。）金は「ストラ、カンボジア、ビルマ」で奪われたものであった。この金は占領中のマラウ（「シア」で溶かされ、トルアンリリー作戦の計画にのつとつて鑄造された。中国からの略奪品は韓国ルートで日本に持ち込まれ、一九九八年冬期五輪開催地、長野近辺の山の地下貯蔵室に秘匿された。

船に載せられた金塊は、一九四五年の引渡しするとき東京湾や他の沿岸で沈められた。そのつちいくらかは取り戻されている。

一九五二年に占領が終了し、破綻した日本が世界第二位の経済大国へ奇跡の回復ができるよつになったことについては、秩父宮とトルアンリリーに感謝するべきであろう。賠償はこまかされ、天皇は罰から逃げ、金融界の精鋭たちは戦争など無かつたかのよつに支配を再開した。日本と天皇家が戦争のため実質的に一文無しになったという主張はそれゆえに完璧に間違っていたのである。

黒い金の巨大なかたまりで用意された戦争略奪品は、戦後の政治家により官僚どもを墮落させるために使われ千年紀には、再び一巡して国家を経済崩壊の淵に立たせたのであった。

ナチの戦争略奪品については多くの調査があつたが、日本人によるアジアでの略奪の調

査は形式的なものでさえなされなかった。

決して略奪の計算を強制されることはないであろう。ナチの略奪は何度も小国をまぎこたぬ。日本のマジマでの略奪の真実は、歴史上から完全に浮いてしまったところにあるのだらう。

戦時中はただの子供であった明仁天皇は、皇室の継承順序を権力者よりも国民に調整させるようにした。事実上、彼は神様との縁を切った。だが昔々の明治維新の神話の中にまだ囲まれている今日、明治の元老や軍国主義者に操られるよりは、大皇家はもうかる金融屋にその姿をかえていた。ナートと軍事信望者からのけ者にされている九十%の人々がいる。辛抱強い日本の国民はやはり実力主義が墮落してきたことを今発見した。長い間待っていた社会改革が始まったまぎざしがある。

普通の人は無駄使いせずに預金する。

むしろ彼らは海外へ投資ではなく日本の銀行へ行く。しかしながら巨大なタンカーのように国と国と船はゆくりともどるのに時間を費やすであろう。

この家族の姿は一つは君主であり、他はかくれた重要な姿で、これは二重人格だ。

蘇我氏と藤原氏が今日に残した真実の下にひそんだ真実とは何であろう。東京での本当の力とは何なのであろう。殆ど知られることも理解されることもない秘密っぽい金融、官僚、政界実力者、無法者の手の中に…

彼らは「口はわさわわいのもと」…見せた時は負ける時「…とか学んで隠し続けている。

公共での皇室の姿はまるで歌舞伎一座のようである。その高度に型にはまったドラマはとてもよい場面で着飾り、そのまわりに覆面をかぶり上から下まで黒い衣で覆われた者が動きまわるような状態で展開した。明らかに誰かに監視されているその黒子は決して役者からも観客からも見えないではないのである。伝統的に彼は完全に見えない。それゆえ退出もしない。舞台主任であり背景であり家具でありドラマが彼の周りを進み続ける様にセットが作り変えられて行くのである。彼は黒子＝黒幕とよばれ黒いヴェールでかくされ、歌舞伎のはるか前の文楽に戻るそこでは、観客ははつきりと人形を操る人と、その助手を見る人が見えるのである。日本の皇室は我々が黒幕の演じる役割を理解してゐるというのを知っている。東京の頂点の生活は多くの隠れた役者をまぎこたぬ。天皇とその家族は彼らにかまわれてゐる。